

## 可能構文における格交替の規則から見た「ニーヲ」パターンの制約

李娜

日本語の可能構文には、「ガーヲ」「ガーガ」「ニーガ」の3つの格パターンがあることがよく知られている。しかし、可能構文は属性を表すものが多いため、「ハ」で標示するのが一般的かつ自然である。すなわち、可能構文に現れる格交替は必須ではない。このような必須でない格標示の使用は理由があると思われる。また、従来不適切と扱われる「ニーヲ」パターンは、ある条件が満たされれば容認度が上がると考えられる。そこで、本発表はまず、可能構文における各格パターンの認可条件を確認した上で、格交替の規則を明らかにする。また、「ニーヲ」パターンの容認度が高まる条件について、解明することを試みる。

分析した結果、可能構文における格交替は恣意的ではなく、交替順序があることがわかった。具体的に「交替過程①ガーヲ」→「交替過程②ガーガ」→「交替過程③ニーガ」となる。そして、このような表面上の順序に関する規則は情報構造にも関わっている。交替過程②と交替過程③にある動作対象/場所を標示ガ格は伝達上の重心となるため、焦点と解釈されやすい。ニ格は、動作主に基づく基準にも解釈できるため、潜在的に対比の用法が生じており、ガ格に比べ、一種の弱い焦点となっている。すなわち、「ニーガ」パターンは、伝達上にある2つの焦点の拮抗作用によって成立している。交替過程③にあるガ格をさらにヲ格に戻すと、ニ格はガ格ほど強い焦点にならないため、不自然となる。このように、「ニーヲ」パターンは、交替順序に違反しており、構造上かつ情報上の欠落があるため、不適切となる。ただし、否定・疑問/複文など情報構造上の操作によって、容認度が上がると主張する。